

梁啓超の国家論に関する一考察 —国権、国民論を中心に—

国際共生社会課程インターカルチャー 于 臣

はじめに

梁啓超（1873～1929）は中国のナショナリズムの先駆者の一人とされている¹。彼の思想活動は大体、三期にわけられ、1896年から1898年までの期間は变法時期である。この時期において梁啓超は、はじめて中国の政治舞台で脚光を浴びた。結局、彼および彼の先師たる康有為が主導した維新運動は西太后が発動したクーデターによって挫折し、彼はやむなく日本に亡命した。日本の土を踏んでから1912年に中国に帰るまで、梁啓超は日本を、政治言論を発表する本拠地とした。これは彼の思想活動期の第二期とされる。そして第三期は1912年から1929年に病死までの期間を指す²。

同じ改良主義者にもかかわらず、梁啓超は1899年から1903年の前半まで、政治的立場において、康有為（1858～1927）との間に大きな相違が現れた。康有為は革命論および満州排斥論に反対するのに対して、梁啓超は賛成の立場にたった。しかし、1903年以降となると、超啓超の政治的立場は一変し、満州排斥論から開明専制論（立憲君主政体）³へと転向した。しかも1906年ごろから、孫中山が主導した革命派と論戦の陣を張った。そして1912年、中華民国が成立した後、梁啓超は立憲君主制をあきらめ、革命派の主張した民主共和論に傾いた。なお、1922年ごろになると、彼はまた偏狭な国家主義論調を批判して、当初康有為が主張した「大同」⁴思想への回帰をみせた。

このように、梁啓超は政治的立場において、幾度も思想の転向をみせている。彼自身は自分の思想的葛藤について反省したことがある。彼は言う。

満州族を排斥し、共和論を主張したが、師の康有為に責められ、何回も書簡のやり取りを行った結果、転向した。そのとき保守性と進取性がいつも胸中に交じり、感情によって発露される。論説は往々にして前後矛盾する。…今日の自分でもって昔日の自分を責めることが頻りにある。世間はこれを癖として非難する。而して言論の効力（社会への影響—筆者注）は往々にして相殺する。蓋しこれは生来の弱点であろう。⁵

すなわち、梁啓超は自分の思想の転向に鑑み、思想言論における自分なりの弱点を素直に認めていたのである。では梁啓超はどのように時々「前後矛盾」の窮地に陥ったのだろうか。彼の抱いたジレンマはどこにあるのだろうか。これまでの先行研究においては、管見する限り、梁啓超の「天下」・「国家」論を扱う論述がみられるが、彼の政治的言論における国家観の位置づけに関する論考がまだ不足しているように思われる。

したがって本論は、梁啓超が主張した「国民」および「国権」論と関連付けながら、彼の国家観念を通観して、その特質をとらえてみたい。

¹ 吉澤誠一郎『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』（岩波書店、2003年）を参照。

² 盧守助「梁啓超の『新民』の理念」（新潟大学大学院現代社会文化研究科紀要編集委員会『現代社会文化研究』33、2005年）を参照。

³ 1912帰国した前後、中華民国がすでに成立した現実を踏まえて、彼は同論を放棄し、共和制に同調した。

⁴ もともと『礼記』礼運篇にある用語だったが、康有為は『大同三説』を主張し、国境がなくなり、全人類が男女、民族、人種に関係なく自由平等になるというユートピアの世界を構想していた。竹内弘行『中国の儒教的近代化論』（研文出版、1995年）を参照。

⁵ 「清代学術概論」1920年、「飲氷室專集」（以下、「專集」と略す）之三十四、p. 63、『飲氷室合集』（以下、『合集』と略す）八。

一、 国家と愛国心

梁啓超はどのように当時、中国人の「国家」認識をみていたのだろうか。1900年、彼は「中国積弱溯源論」のなかで、中国人の愛国心の薄弱さを分析した。その理由として、彼は、それは中国人が国家と「天下」の区別を知らないこと、国家と朝廷の限界を区分しないこと、国家と国民の関係を認識していないことに起因していると論じた⁶。

そして「国家」というものは、「天下」といかなる関係を持っているかについて、梁啓超はすでに1899年2月に「愛国論」において論及したことがある。そのなかで、彼は、中国人が自国を「天下」と称し、国と称さないということをとらえた。そして国がないからには、愛する対象がないのは当然であるという。具体的に、彼は「中国人は従来、自分の国が国であることを知らない。周辺にある国を、みな蛮夷としている。これらの国には文物もなく政体もないから、国とみなされない」と述べている。換言すれば、中国人は周辺の諸国を国とみなしていないので、国という用語で区分する意味がなくなる。したがって、「他国の存在を意識してからこそ自分の国を愛することを知る」⁷と梁啓超は結論づけている。さらに彼は西洋人の愛国心を引照しつつ、「西洋人の愛国心の強さは、古代ギリシャからすでに存在した諸国の独立と競争によって生まれたものであった」⁸と説いた。すなわち、外国との競争を通じて国家に対する愛着が生まれるということである。

梁啓超は「中国の弱さを救おうとしないのは意気地がないことである。そのうえ、中国がどのように弱くなってきたのかについてその根源を知らなければ救う術がない」と説いた⁹。つまり、梁啓超は中国人の国家意識の浅さの原因を探求せんとしていた。

では、中国人はどうして「天下」と「国家」を意図的に区別しないのだろうか。その文化的根源はどこに求めるべきであろうか。

梁啓超は1902年、「新民説」のなかで、孔子の時代まで溯りながら、この問題の解明を試みた。彼は言う。

孔子は『春秋』を作って国境というものを破ろうと努めた。…、文治をもって太平の世間を目指す。

(そして) 孟子は天下の悪をおさえ、一極に落ち着かせようとする。その他の先秦諸子の政治策略は、みな諸国の統一を第一義とする。…中央集権や思想統制を行う。こうして国家主義というものは遂に途絶えた。…後人はこうした統一(された世間)に慣れて、愛国のことを忘れてしまう。¹⁰

ここで、梁啓超は中国の古代儒家における「天下」統一の思想を解している。彼のみるところ、「中央集権」および「思想統制」によって、中国には平和の実現がみられ、外国と対立する意味での「国家主義」が見失われているのである。また彼は「中国の儒者はややもすれば、『平天下』や『治天下』を口にする」と述べ、「国」より「天下」に拘泥する儒者の限界を把握した。その例として、彼は董仲舒の『春秋繁露』および張載の『西銘』をとりあげている。この二者の論調の共通した点に関して、梁啓超は、彼らは「国家を微小なものとして追及する意図がない」¹¹と論じている。こうして、梁啓超は国家というものに対する認識の不足は、愛国心の弱さに結びついたと捉えている。

また、梁啓超は中国の従来の風俗における弱点を突いた。それは民衆の奴隷根性、無知、利己心、勇気・主体性の欠乏ということである¹²。こういったなかで、梁啓超はことに利己心という問題の深刻さを指摘していた。

⁶ 「中国積弱溯源論」1900年、「飲氷室文集」(以下、「文集」と略す)之五、pp. 14~18、合集一。

⁷ 「中国積弱溯源論」、同上、p. 15。

⁸ 同上。

⁹ 同上、p. 12。

¹⁰ 「新民説」、『飲氷室文集類編』(東京：下河辺半五郎、1904年)上、pp. 122~123。

¹¹ 同上、p. 122。

¹² 「中国積弱溯源論」、同上、pp. 18~28。

この利己心に関連し、梁啓超は「群」¹³についての論述を展開した。彼は、人間の社会性を論じたいうえで、中国人は意識の中で自分のことしか知らず、集団・社会、すなわち「群」に属することには鈍感であるという点を指摘した¹⁴。なお、この点に関する批判において、彼は前述した国境の意識の薄さと関連付けながら行ったのである。彼からみれば、中国人の意識において、国境の観念がないのに対して、個人と個人の交際は自他の境界がある。これは「天性によるものである」という。そして、「国」の境に対する認識が薄まるかわりに、郷土・宗族・身内における境の存在はかえって目立つようになるという。かくて、結局中国の「四万万の人」はそれぞれ「四万万の国」となった¹⁵と。いいかえれば、梁啓超のみるところ、中国人は国家観念の弱さと対照的に、自分のことをもっとも重んじていた。

この延長線上において、梁啓超は中国人の公共観念の欠如に対して批判を加えた。そして、彼は公共心の養成に必要とする「合群」の思想を唱導していた。「合群」とは公共心を持ち、聯合しながら公益に寄与することである。梁啓超は「合群」の必要性に応じて、「この物競（生存競争）天沢¹⁶（自然淘汰）の世界において、人治をもって天道に勝ちたいなら、この（合群の）術以外にはない」¹⁷と述べていた。しかも、この「合群」精神を呼び掛けた時、梁啓超は墨子の兼愛主義¹⁸を援用しながら唱えていた¹⁹。

一方、梁啓超は国民に国家思想を持ってもらうように、ひたすら利己主義を批判したわけではない。彼は中国人の既存の思想観念を踏まえて、利己主義を拡充させることで国家思想を養成せんとする啓蒙運動に臨んでいた。彼は「我が同胞の抱いた利己主義を排除することをあえて望んではない。（そのかわりに）この主義を拡充し、固めることに期待する」と述べていた。また「いかにして真に利己を実現し、己の利を永遠に失わないようにできるかといえ、国家思想を養成しなければならない」²⁰と力説した。つまり、国家思想の養成によって個体の利己主義を確保するというテーゼである。その後、彼は国民の政治への参与を呼び掛けた際、国家と個人との緊密な関係をないがしろにし、権力を一部の官僚のみに任せることに反対し、「今日のいわゆる愛国は『愛国』という美名に追いかけるのではなく、自身・家族の安全発達を望むなら、国家の整合を目指さなければならない」²¹と説明していた。つまり、梁啓超は、国家というものは個々人の利益に直結していることを民衆に宣伝しようとしていたのである。

二、国家と強権

1. 強権と自由権

歴史上における国家形成の過程について、梁啓超は「人間が生まれてから、人類は無数の小さい部落をそれぞれ形成し、お互いに競い合って、大きな部落に発展する。大きな部落が相競うことで種族が成り立つ。種族は次第に大きな種族になり、相競争して国家を形成する。そして大きな国家となり、お互いに競った結果、帝国が生まれる。さらに大帝国まで発展する」²²と述べている。ここで、梁啓超は国家の形成における国家間の競争の意義を強調した。

こういった文脈において、梁啓超は競争を好まない中国の特質を批判した。つまり、「中国は西洋国と異

¹³ 「群」という語彙は嚴復が「Society」という用語を中国語に訳したとき使ったもので、社会という意味である。その後、日本の訳語である「社会」のほうが一般になっていた。

¹⁴ 「中国積弱溯源論」、同上、p. 23。

¹⁵ 「新民説」、同上、pp. 122～123。

¹⁶ 梁啓超のいう「物競天沢」および優勝劣敗は、嚴復の「物競天沢」「適者生存」と日本語の「生存競争、優勝劣敗」との集合体である（「自由書」、専集之二、p. 23、合集六）

¹⁷ 「新民説」、同上、p. 181。

¹⁸ 墨家は春秋戦国時代の「諸子百家」の一つである。その主張の一つには「兼愛説」がある。つまり、天が万物を公平無私に愛するがごとく、人は自分の家、国を愛すると同様に他人の家および国を愛すべきという主張である。

¹⁹ 「新民説」、同上、p. 117。

²⁰ 同上、p. 124。

²¹ 「国民浅訓」1916年、専集之三十二、p. 1、合集八。

²² 「論民族競争之大勢」、1902年、文集之十、p. 23、合集二。

なり、天下には自国以外、他の国がないと思う。この結果、傲慢して、他国と接することを好まず、また臆病で他国と競争することを嫌う」²³と。また彼は、中国の儒家が従来主張してきた「讓」の精神に対して不満を漏らした。彼は言う。

中国儒家の言論は、みな「讓」のことを教える。上の権力者に対して、民を保護し、民を養い、…「讓」(の精神)を以て誘導し、その強権を濫用しないように要請する。下の被支配者に対して、恭順や服従の精神を教え、…「讓」(の精神)を以て指導し、(権力者の)強権を奪わせないようにする。…(その結果)権力や幸福は必ず「讓」の精神を持たない者(他国)に奪われる。²⁴

ここで、梁啓超は中国の伝統における「讓」の思想を批判している。そのかわりに彼は強権の理念を唱え始める。1899年、彼は「自由書」を著し、その理念を明らかにした。

梁啓超からすれば、強権は強者の権利(The Right of the Strongest)を指し、強者が弱者に対して実施する権力のことである²⁵。強権のイメージに関して、彼は「普通の場合、強権や権力というと、人々に嫌われる。これに対して、自由権や人権は好感を持たれる」²⁶と説いた。ここから梁啓超は啓蒙思想家として一般民衆の心理的特徴に配慮したことが判明する。そして彼は次のように論述を続けている。

強権と自由権は、その本質が同一である。…その主たるところは、他者の妨害を取り除き、自分の欲するものを得ることである。²⁷

ここで梁啓超は、人の好悪にかかわらず、「強権」を「自由権」と同一視している。なお、理想論における自由と平等について、彼は「天は人を生んだものの、人々に自由平等の権利」を与えるわけではないと力説した。いうまでもなく、これは西洋の天賦人權論に対する批判である。さらに彼は、先師の康有為の「天道が無常で、つねに強者を助ける」という文章を引用し、それを至言としていた。つまり、強者こそいつも「天道」に恵まれるということである。最後に梁啓超は、国家、自由と強権の三者の関係をめぐって、「世の中、強権のみあり。これは進化の『公例』(普遍原則)である。自由権を欲するなら、ほかの道がなく、強者になるしかない。自国の自由がほしいなら、国を強めなければならない」²⁸と。ここで、梁啓超は強い国家主義の思想を示している。それは上記した「讓」の精神ではなく、積極的に他国と競争し、国力を強めることである。

また梁啓超は、進化論の理論を借りながら、強権の理論を主張した。すなわち、「其れ物が競い、天に選択されるという優勝劣敗(の現象)は、進化論の公理である。人々、各々自存を求める。そのため、勝利を追求し、優秀さをもとめる。優勝を得るために、己の自由の権力を拡充する」²⁹と。ここで、梁啓超は自力で「自由」の権利を拡張することを急務としている。

上述した強い国権の主張とともに、梁啓超は国家政治における「干渉」と「放任」について次のように見解を述べている。

干渉主義とは、中央集権の国家体制は政府の力を以てこれを監視し、働きかけることである。重んじるのは秩序のことである。(これに対して)放任主義とは、権力は個々人に任せられ、すべてのことについて、民間の人々は自己選択により自治を行い、自ら発展する。重視するのは自由のことである。…二十世紀は干渉主義が圧勝の時代である。帝国主義は干渉主義の別称である。…今日の中国の弊害は、干渉すべきところを放任にし、放任すべきところを干渉にすることにある。今日の中国を治める

²³ 「中国積弱溯源論」、同上、p. 15。

²⁴ 「政治学学理?言」1902年、文集之十、pp. 67~68、合集二。

²⁵ 「自由書」、同上、p. 29。

²⁶ 同上、p. 30。

²⁷ 同上。

²⁸ 同上、p. 31。

²⁹ 「政治学学理摭言」、同上、p. 68。

には、干渉主義は十分の七まで実施すべきであり、放任主義を十分の三にすべきである。³⁰

ここで梁啓超は、あきらかに当時の中国の政治体制における干渉主義を優先している。換言すれば、梁のみるところ、当時の中国にとって個人の自由より、秩序のことはもっとも大切だったろう。

2. 国家有機体説

1903年、梁啓超は「政治学大家伯倫知理之学説」を著した。これがきっかけで、多くの先行研究は梁啓超がこの時点において転向したと論じている。すなわち「排満」（満州族排斥）論を放棄し、立憲君主制の主張に傾いたことである。筆者からすれば、梁啓超のこうした転向は、がらりと立場を変えたというより、転向する前の言説とは明らかな連続性があるように思われる。次に梁啓超はいかにブルンチュリからの影響を受けて、国家有機体説を唱えたかについて考えてみたい。

前述のように、梁啓超は中国人に「国」という意識が薄かったとして、国家観念の形成を呼び掛けた。今回、彼はさらに国家有機体説を以て、国家のあるべき姿を論じていた。彼からみれば、中国は名称において「国」であるが、「国の形体を具えなければ国がないことと同じ」³¹である。つまり、梁啓超にとって、国家に対する認識は、意識上のものにとどまるだけではまだ不十分である。それ以外、形体上の国家の存在を強調しなければならない。

そのため、梁啓超は先ず国家を一つの有機体としてとらえた。この有機体は「動植物が天から造られるものと異なり、人力を借りて作られたものである」³²という。そして、こういった有機体の特徴をめぐって、梁啓超は「成長できない機械の部品と異なり、発育・成長する」³³と説明した。換言すれば、この時点で梁啓超がとらえた国家というものは、国民が自分で作る、成長しつつある一つの有機体であった。

なお、同文において、梁啓超はブルンチュリのルソー批判を要約しながら、ルソーの「民約論」（共和制）と決別した。その理由として、彼は「民約論の徒は国民と社会の別を知らず」³⁴、「民約論は社会に適して国家に適せず」³⁵と解している。そして、民約論が当時の中国に適合するかどうかについて、彼は当時の中国に「最も必要となるのは、国家の有機的統一と有力な社会秩序であり、自由平等はその次である」³⁶と説いた。つまり、梁は理想論上の自由と平等より、むしろ秩序を確固たるものにする国家の形成を最優先している。これは前述した国権論と一脈相通じていると考えられよう。

前述したように、1903年前半まで、梁啓超は基本的に君主専制および満州族の統制に反対し、共和論者として論陣を張ったが、この国家有機体説によって立場が変わった。彼はブルンチュリを解釈した時、専制君主主権体制は弊害が多いとはいえ、国家を成り立たせる点において評価すべきであると主張した。これに対して、国民が主権を持った場合、「公民（国民）の意見は（ばらばらで）終に整えない」³⁷ので国に動揺を与える可能性があるという。こうして、民主共和制が当時の中国に適合しないと判断していたのである。

この国家有機体説を唱える中で、梁啓超は、君主専制および「大民族主義」を主張していた。彼は革命派の満州排斥論に反対した際、「小民族主義」および「大民族主義」について、次のように述べている。

君主専制体制（の国）および中国では民族主義といえ、小民族主義とともに大民族主義を提唱すべきである。小民族主義はなにかというと、漢民族が国内の他の民族と対立することである。（これに対して）大民族主義とは、国内の本・支部の諸侯（すべての民族）をあわせて国外の諸侯（外国）と対

³⁰ 「自由書」、同上、pp. 86～87。

³¹ 「政治学大家伯倫知理之学説」、文集之十三、p. 68、合集二。

³² 同上、p. 70。

³³ 同上、p. 71。

³⁴ 同上、p. 68。

³⁵ 同上、p. 69。

³⁶ 同上。

峙することである。³⁸

「小民族主義」より「大民族主義」を必要としている梁啓超は、革命派の持っている、満州族を中国から駆逐するという論調には賛同しなくなった。彼は言う。

若し建国の能力を有すれば、小民族でも国民となることが可能であり、大民族も国民を為すことが可能である。³⁹

換言すれば、梁のみるところ、中国の国民は漢民族のみならず、その他の民族を含めるべきものである。そして、今後の中国は「帝国主義の政略」をとるべく、漢民族は「満、モンゴル、回、ミャオ、チベット」を統合して、一大民族を結成しなければならない」と。いいかえれば、漢民族以外の民族を排斥するのではなく、中国のすべての民族を連合して、外国の民族の侵略に抵抗すべきであるという立場である⁴⁰。

上述した君主制および大民族主義への主張からみれば、一見して梁は大きく転向しているようにみえるが、彼にとって、国家を統合し、国力を増進させることを最終の目標とした立場は終始変わっていないと考えられる。

実は、梁啓超は1901年に「康南海先生伝」において、康有為の国家主義の欠乏を批判した。次である。

康の最も欠けているのは、国家主義である。先生は教育において重視しているのは、個人の精神、世界的理想である。二者は要らないわけではないが、しかし、今日の中国に二者を実施する場合、(中略)競争の世界で戦勝を得ていない。遺憾極まらない。⁴¹

すなわち、梁啓超は、はやくも生存競争で生き残るために強い国家主義を抱いていたのである。

三、国家と「新民」⁴²

1. 「新民」

強い国家を建設するために、いかに新しい国民を作っていくかが梁啓超の直面した次の課題である。

彼は「思想は制度の源泉である。過去思想は常に歴史上の無上の權威によって実質的に現代人を支配している。それによっていわゆる国民意識が形成される。政治およびその他の一切の組織は、国民意識という入口を通らなければ断じて有効にはなれない」⁴³と述べている。つまり、梁啓超は政治制度および国家の組織における国民意識の形成を先決問題として扱っている。そのなかで、彼はとくに国民の気風と品格に着目していた。彼は「国家の強弱は、国民の志向・品格にかかわる」⁴⁴と言い、また「国民というものは個人の集合体である。個々人は高尚な道徳を有すれば、国民の気高い品格が形成される」⁴⁵と論じている。ここで、梁啓超は国民の気品と国力の緊密な関係を認識している。彼は当時の中国の現状に関して、「今日にいたってもいわゆる家族の組織、国家の組織、村落組織、社会組織ないし風俗、礼儀、學術、思想、道徳、法律、宗教などのすべての現象は、まったく三千年前のものと変わっていない」⁴⁶と評している。つまり彼からすれば、当時中国の社会・国家体制には変動がない限り、先進国に追いつくことが無理だったろう。また彼は当時の中国の国民の品格には、「愛国心の薄弱」「公德の欠如」「自治力の不足」⁴⁷と

³⁷ 同上、p. 87。

³⁸ 同上、pp. 75～76。

³⁹ 同上、p. 76。

⁴⁰ 同上、p. 76。

⁴¹ 「南海康先生伝」、『飲氷室文集類編』下、p. 394。

⁴² 梁啓超の新民概念は民族主義、民族帝国主義の概念と同時に登場したという(李惠京「天下觀の崩壊による人間觀の動揺—梁啓超の『変法通義』から『德育鑑』まで」、日本中国学会『日本中国学会報』通号50、1998年)。

⁴³ 崔志海編『梁啓超自述』河南人民出版社、2004年、p. 141。

⁴⁴ 「中国積弱溯源論」、同上、p. 14。

⁴⁵ 「論中国国民之品格」1903年、文集之十四、p. 5、合集二。

⁴⁶ 「新民議」1902年、文集之七、p. 106、合集一。

⁴⁷ 「論中国国民之品格」、同上、pp. 2～4。

いう欠点が残っているとみていた。

したがって、梁啓超は「新民」という用語を提示し、新しい国民の誕生に期待を寄せていた。まず「新」の定義について、彼はその二つの特徴を説明した。第一に、本来、持っているものを淬厲（活性化）し、新たにすること、第二に、もとより無いものを採補（補足）し、新たにすることである⁴⁸。ここの「淬厲」と「採補」はいうまでもなく、梁啓超が西洋の進んだ文明を念頭に置きながら提起した用語である。

次に「新民」がいかに関西学および中国の伝統との関係処理すべきかについて、彼は「我が国『新民』は西洋に心酔するものではなく、伝統を固守するものでもない」⁴⁹と述べている。つまり、梁啓超からすれば、「新民」は、西洋学と中国の伝統を合理的に融合すべきである。彼は国粹の保存のみを狙うのが不健全な愛國論だと断言していた。また、彼は「泰西の學術は我が国の先哲がすべて述べていた。泰西の形而下の技術は容易く取り入れられる。その礼儀と風俗はとる価値がない」⁵⁰という説に反対したのである。これは彼が洋務派の「中体西用」論、すなわち、中国伝統の礼制を本体、西洋の機械・技術文明だけを導入せんとする論調に反対の意見を出していたのである。

一方、前述のように梁啓超は中国人の利己心を気かけ、国民の公益に寄与する「合群」の精神を呼び掛けていた。「新民」の道德に関して、彼はとりわけ「私徳」と公德の概念を提起し、公德の形成に期待した。公・私徳の概念について、彼は「人々はそれぞれ自身を善くするのは私徳のことである。人々相互に善くし、その『群』（集団）を善くすることが公德である」⁵¹と定義した。ここの私徳は、彼が批判した利己心というものと似通っているものであろう。

2. 民と自由権

1899年、梁啓超は著した「自由書」を通じて、「自由」の重要性をアピールしていた。そうした中で、自由権と強権は同一のものであるという彼の視点は前述した。彼は「もし我が国民がその自由を放棄しなければ国賊は権力を独占することができない。もし我が国が自由権を放棄しなければ虎狼の国は（中国に）侵入できない」⁵²と述べている。ここで、梁はあきらかに民権を主張したとともに、国の「自由権」を呼び掛けている。では国の自由と民の自由との関係はどのように処理すべきであろうか。

梁啓超は制限のある自由を主張している。彼はミルの自由論を引用し、「制裁の規則があるからこそ、自由をいうことができる。制裁の規則がなく自由を言うものは、自由を愛することではなく、恣意さを愛することのみである」⁵³と論じた。ここから、梁啓超は無政府主義者のような自由論に同調していないことがわかる。はやくも1900年、梁啓超は自由のことを説明した時、「真正な自由な国民は、常に服従する点がある。それは公理、所属集団の制定した法律、多数の決議である」⁵⁴と述べている。換言すれば、梁啓超のいう自由は原則があるものである。

そして、国家の自由は個人の自由より優先していることを次の論述から窺うことができる。梁啓超はいう。

一国内の人々の自由を保護するなら、まず一国の自由を確保しなければならない。もし国家の自由を失ったなら国民の自由が付するところはない。帝国主義が盛行している今日、権力を中央に集めなければ、国家は安定しない。それゆえ、ブルンチュリの如く、大いに国家主義を唱える人がでた。⁵⁵ここで、梁はブルンチュリの国家主義を引き合いにしながら国家の自由の優位を主張している。

⁴⁸ 「新民説」、同上、p. 106。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 「国民浅訓」、同上、p. 18。

⁵¹ 「新民説」、同上、p. 113。

⁵² 「自由書」、同上、p. 24。

⁵³ 「服従釈義」1903年、文集之十四、p. 17、合集二。

⁵⁴ 「十種徳性相反相成義」1900年、文集之五、p. 46、合集一。

それにもかかわらず、梁啓超は民の自由を主張する。つまり「今日の中国を救うなら、かならず人々に権力、自由を有することを知らせる」⁵⁶と。また、前述のように民が自由を放棄する場合、国賊は国家権力を独占することになる。言い換えれば、民は権利を持たなければならない。こういった民権論の主張にあたって、梁啓超は1901年、「国家思想變遷異同論」で、ヨーロッパの新しい思想と比較しながら、人民と国家の関係を説明した。ヨーロッパの思想の場合、国家は生きる物であり、人民の公有物である。だれも独占することができない。人民は国家と一体となり、人民の盛衰は国家の興亡と同じである。これに対して、中国の古い思想の場合、国家と人民は、はっきりと分離している。国家は死物で、私物でもある。そして一部の人は強権、優先権で国家を独占することができる。こういった場合、人民の盛衰は国家の興亡と関係がない⁵⁷。ヨーロッパと中国を比較した結果、梁啓超は国賊が権力を独占することに反対し、ヨーロッパのように国家を公有物とし、人民は権力を持たなければならないと唱導している。しかもヨーロッパの国家が「生きる物」であるという論点は、後年、彼の唱えた国家有機体説と通底しているといえよう。

3. 民族主義と「民族帝国主義」

1902年になると、新民説を出していたと同時に、梁啓超は強権論につながる民族主義、ならびに「民族帝国主義」のことを論じた。民族主義の定義をめぐって、彼は次のように述べている。

欧州が発達し、世界が進歩を遂げたのは、民族主義によるものだった。Nationalismというものである。

民族主義とは、各地の同種族、同言語、同宗教、同習俗の人々は相互に同胞とみなし、独立自治を行い、まとまった政府を組織し、公益を謀り、他民族に立ち向かうことである。⁵⁸

ここで梁啓超は、民族主義を世界の進歩を促すものとみている。また「他族に立ち向かう」というのが民族主義の大きな特徴とされる。しかも梁啓超は、民族主義が世界中においてもっとも公平正大な主義であると捉えていた⁵⁹。では「民」と民族主義との関係はどうだろうか。

梁啓超は「今日、列強の民族主義に対抗し、中国を救うためには民族主義をとらざるを得ない。民族主義を実行するには新民が必須である」⁶⁰と力説した。つまり、当時の中国では、民族主義を実施する前提として「新民」を養成しなければならない。

そして、世界における民族主義の発展について、彼は、19世紀の末期になると、民族主義というものは「民族帝国主義」の段階まで発展したという⁶¹。では具体的に、梁啓超はいかに総体的に世界の民族主義および「民族帝国主義」の発展史を把握していたのだろうか。

梁啓超からすれば、18世紀と19世紀は民族主義が飛躍した時期である。とりわけフランス大革命は空前の偉業をつくり、全世界に刺激を与えたという⁶²。そして民族主義が発達した結果、民族主義国家は既存の幸福に飽き足らず、国外に拡張しはじめる。よって帝国主義が流行し、19世紀後半になると盛行することになった⁶³。さらに梁啓超は19世紀の帝国主義は、18世紀以前のものとは性格を異にしていたと捉えている。すなわち、昔の帝国主義において、政府は一人の君主を主体とする。これに対して、19世紀以降の帝国主義は国民を主体としている。こういった国民を主体とする帝国主義を、梁啓超は「民族帝国主義」と定義した⁶⁴。

⁵⁵ 「答某君問法国禁止民権自由之説」1903年、文集之十四、pp. 30～31、合集二。

⁵⁶ 同上、p. 31。

⁵⁷ 「国家思想變遷異同論」1901年、文集之六、p. 16、合集一。

⁵⁸ 「新民説」、同上、p. 104。

⁵⁹ 「国家思想變遷異同論」、同上、p. 20。

⁶⁰ 「新民説」、同上、p. 105。

⁶¹ 同上、p. 104。

⁶² 「国家思想變遷異同論」、同上、pp. 19～20。

⁶³ 同上、pp. 20～21。

⁶⁴ 同上、p. 22。

さらに梁啓超は「国家思想變遷異同論」において、当時の世界政治情勢に関して、欧米諸国では民族主義と「民族帝国主義」が混じっていると分析した。これに対して、アジアはまだ帝国主義と民族主義が混じりあっている時期であるという⁶⁵。そのなかで、梁啓超は中国の将来を懸念し、「今日、中国を救うなら、他の方法がない。まず民族主義の国家を建設しなければならない。（こうして中国は）地球上最大の民族を以て進化論に適する国家を建設すれば、天下第一帝国という称号はだれも奪うことができないだろう」⁶⁶と力説していた。明らかに梁啓超は当時の中国を民族主義国家、ひいては「天下第一帝国」に建設せんとする意志を表明したのである。

次に、梁啓超は人民、民族主義ならびに帝国主義に配慮しつつ、学術面における国家思想についての議論を展開している。

現今の学術界のいう国家思想に関連して、大きな流派が二つある。第一に、平権（権力平等）派である。ルソーがその代表者である。（この流派において）国家は人民の総意を執行し、政府は民意に従わなければならない。これは民族主義の原動力となる。第二に、強権派である。スペンサー等の進化論者がその代表者である。（この流派において）天下には天賦の権利が存しない。個々の人間は生まれながらにして不平等である。（この場合）人民は政府の無限の権限に服従しなければならない。これは新帝国主義の原動力である⁶⁷。

ここで、梁啓超は国家思想の理論的根拠において、「平権派」と強権派⁶⁸を分析し、それぞれ民族主義と帝国主義を発展させたと捉えている。彼は、世界各国の国情の相違に配慮しながら、中国はいつか必ず帝国主義の段階に到達すると断言したことがある⁶⁹。

ここからすれば、1903年、梁啓超は政治論において、転向がみられたが、その思想的根拠はすでに早い段階において、準備されていることが判明する。しかも彼はルソーの民約論を見直した場合、必ずしもルソーを完全に否定しておらず、それは国家有機体説にいたるまで、経由せざるをえない途中作業であるという⁷⁰。

そして、こうした国家の秩序をより重視した国家有機体説から出発して、梁啓超は1906年に「開明専制論」を著し、君主制度をあらためて主張し始めたのである。そのなかで、彼は近代国家が自覚的に専制的権力を行使することで国民統合を行おうとする構想を示した。なぜ共和制がだめか、その理由に関して、梁啓超は「今日の中国国民には、まだ議院政治を行う能力がない。それゆえ、私はためらうことなく断言できる。今日の中国国民は共和国たりうる資格を持っていない。今日の中国政治は共和立憲制を採用すべきではない」⁷¹という。ここで、梁啓超は国民の実情をふまえたうえで、政治体制発展の漸進論を展開したことが判明する。

おわりに

梁啓超はたしかに幾度も思想の転向がみられ、彼自身も思想において「前後矛盾」の弱点があると認めている。問題となったのは、彼のジレンマ点はどこにあるかということである。筆者からすれば、彼の悩んでいたのは当時の中国をどのような国家を建設すればよいかということである。そのため彼はおもに「国民」と「国権」の視点から国家論を展開している。

⁶⁵ 同上、p. 19。

⁶⁶ 「論民族競争之大勢」、同上、p. 35。

⁶⁷ 「国家思想變遷異同論」、同上、p. 19。

⁶⁸ 梁啓超は日本に滞在した間、日本における社会進化論のブームに傾倒し、有賀長雄から影響をうけた。つまり、天賦人權論の否定に基づき、個人の自由の実現より国家を強めることを先決問題とした進化論の立場である（佐藤慎一「梁啓超と社会進化論」、東北大学法学会『法学』59（2）、1996年）。

⁶⁹ 「答某君問法国禁止民権自由之説」、同上、p. 31。

⁷⁰ 「政治学大家伯倫知理之学説」、同上、p. 69。

⁷¹ 「開明専制論」、文集之十七、p. 67、合集二。

梁啓超は早くも「天下」と「国家」の区別を知らない国民の弱点に気づき、それを中国人の愛国心の薄さと直接的に結びつけているととらえた。そのなかで彼はただひたすらに中国人の国民性を批判するのではなく、孔孟の時代にまで遡り、思想的根源を探ろうとしている。同時に彼は中国の民衆が従来持ってきた弱点をずばりと突いて、公德・公共心の養成を必要としていた。

そして、梁啓超は中国人の伝統的国家思想に鑑み、「自由書」のなかで、国権の重要性を強調した。そのなか、彼は「自由」という概念を国権と同じ次元でとらえている。つまり、個人、ひいては国家の自由を欲するなら、国を強めなければならないということである。なお、国家の独立によって個人の自由が確保されるという意味で、国家の形成および社会秩序の安定性をもっとも重要であるという。そのため、中央政府による干渉主義は、場合によっては必要であるという立場をとっていた。その後、彼はブルンチュリの国家有機体説に傾倒し、ルソーの共和論と決別し、君主専制論をふたたび唱導し始めたが、国権思想においては前後で矛盾しているというより、一貫性があるように思われる。これは当時の世界政治情勢と緊密にかかわっているものだろう。いかに中国という国家を強め、独立させるかが梁啓超の直面していた大きな問題である。彼は強い国家の形成をめどに革命派の満州族排斥論をすて、満州族、モンゴル族、回族、ミャオ族、ならびにチベット族との統合を中心とする「大民族主義」を唱えたのである。

また、上記の国家思想を展開した際、梁啓超は、加藤弘之や中江兆民⁷²、ミルやルソー、ブルンチュリの思想を活用している。これは中国の伝統思想に対する彼の態度および学問観とかかわりあっている。彼は新しい国民を作ろうとする「新民」説を唱えた時、洋の東西を問わず、あらゆる学問を合理的にとらえようとしていた。彼はいう。

新思想を建設する事業において、確信しているのは、他の社会思想の全部を移植することを絶対すべきではなく、少なくとも自分の社会の遺伝共業⁷³を踏まえたうえ、自然に啓発させ、合理的に選別・吸収すべきである。⁷⁴

つまり、伝統を生かしつつ、あたらしい思想の形成を目指す立場である。次に問題となるのは、なにを基準にして西洋と中国の学問を適宜に採用すべきであるかということである。梁啓超は「四書五経の義理はその一々今日の用に適していない。…我に耳目があり、物事については我自身が正す。我に思考力があり、理は我自身が窮める。…古人に対しては、ときには師事し、時には友とし、時には敵にする。これは、心の恣意さを容認するわけではなく、公理を以て判断することだけである」⁷⁵と説いた。すなわち、自分なりの「公理」によって思想活動を行うことである。梁啓超はまさにこうした学問観に基づいて、国家論を展開したのではなかろうか。

第一世界大戦後、梁啓超の国家論にはまた微妙な変化が現れた。彼は狭い国家観念を修正しようとした。きっかけはドイツの戦敗である。彼の見るところ、それはドイツの国家主義の失敗である。つまり、ドイツの国家主義が偏狭な方向へ発展した。そのなか、国家主義の基準は国家自身の目的とされ、人民の個性は国家に飲み込まれてしまったのである。こうしたドイツの教訓を汲み取り、彼は国民の「尽性主義」を主張し、人々は天に賦与された良い能力を円満に発揮すべきであるという⁷⁶。また彼は国家主義というものに対する認識を新たにした。彼は次のように述べている。

国家主義の苗は人類が互いに憎む感情により、日増しに繁茂してきた。したがってこの主義が発達す

⁷² 鄭匡民は、梁啓超が中江兆民や加藤弘之の思想家から大きな影響を受けたと論じている（『梁啓超啓蒙思想的東学背景』上海書店出版社、2003年）。

⁷³ 梁啓超は「文化」を定義したとき、人類の心の能力が開き、蓄積した、価値のある「共業」のことであるという。そして、人間すべての心身活動は瞬間的に消えたにもかかわらず、その「魂影」（成果）は永遠に彼の所属する社会、ひいては全宇宙に残る。その「魂影」はまさに「共業」のことである（「什麼是文化」、文集之三十九、p. 98、合集五）。

⁷⁴ 前掲『梁啓超自述』p. 141。

⁷⁵ 「新民説」、同上、p. 150。

⁷⁶ 「欧遊心影録節録」1918年、専集之二十三、p. 24、合集七。

ればするほど現代社会の不安定な現象はますます著しくなる。⁷⁷

ここで、梁啓超は人類全体の視点から国家主義の限界を見極めている。狭い国家主義を強調しすぎると、社会はかえって不安定になると彼は懸念している。その代わりに、彼は中国の伝統文化の見直し、国家主義の欠陥を補おうとしていた。彼はいう。

（中国は）文化が生まれてから、終始国家を人類の最高次元の組織とみなしていない。中国人の政治論はつねに全人類を対象とした。それゆえ、その目的は「平天下」であり、国家がただ家族と同様に「天下」を構成する一段階である。⁷⁸

ここで、梁啓超は国家より全人類（「天下」）に焦点をあてて、中国人の政治論の広いビジョンを評価している。当時、第一世界大戦後の惨状を目にした彼は西洋世界における文明の限界を指摘し、中国人が世界文明に対して、重大な責任を持っていると考えていた。彼は中国の文明をもって、西洋の文明を補助せんとしていた⁷⁹。

そして人類全体の文明における国家の位置づけについて、梁啓超は国家を建設することは、人類全体を進化させる手段の一つであると説いた。換言すれば、国家があれば、この国のなかの人々の文化の力をまとめやすくなる。そして、後人はこの文化を継承し、発展させる。こうして人類の文明は進むことになる⁸⁰。あきらかに、梁啓超にとって、国家というものは、すでに各国が競い合いながら拡張させようとする組織ではなく、人類全体の進歩をもたらす手段の一つに過ぎなくなっている。

総じていえば、梁啓超は彼のある政治・社会背景に基づきながら、自分なりの国家像を探ろうとしている。それゆえ、彼の国家思想は鮮明に時代に特徴づけられていた。彼の思想活動を考察するにあたって、転向などの特定の時点での変化に着目するより、長いスパンで通観することで、その全体像を理解すべきではなかろうか。

本論は、「国権」および「国民」論を中心に梁啓超の国家論を再考したが、経済論、文化論の視点からの考察が不足している。とりわけ、伝統思想との関連性については、検討する余地がまだ残っていると思う。これを今後の課題としてゆきたい。

⁷⁷ 「先秦政治思想史序論」1922年、専集之五十、p. 2、合集九。

⁷⁸ 「欧遊心影録節録」、同上、p. 35。

⁷⁹ 梁啓超はわかりやすく自説を展開するために孔子、老子、ならびに墨子という三大聖人が西洋への文化の伝達を後人に期待しているという（「欧遊心影録節録」、同上、p. 38）。

⁸⁰ 「欧遊心影録節録」、同上、p. 38